

国境を越えた文学

利沢行夫 編



国境を越えた文学

利沢行夫 編

〈検印廃止〉

定価はカバーに表示

国境を越えた文学

編者

発行者

利沢 行夫
近藤 恆夫

発行所

英潮社出版株式会社

東京都千代田区飯田橋三三三三
電話 東京 二六三一 六四一（代）

振替口座 東京

五五四〇七
（〒一〇二）

（製版・明光堂印書局）

（一〇九八―九〇二一―〇六一七）

〈ST32-1B〉

目

次

近代日本文学と西洋

朔太郎の外国

漱石とオースチン

おお！ トスカーナびとよ

——ダンテ『神曲』邦訳史のための序章——

有島武郎とアメリカ

現代日本文学とキリスト教

——椎名・遠藤・小川を中心に——

西洋作家と日本

日本におけるカミュ

エズラ・パウンドと東洋

「白樺」派とホイットマン

現代作家へのアメリカ文学の影響

——大江健三郎をめぐる——

大久保敏彦
児玉実英
鈴木保昭
利沢行夫
120 106 93 79

久保忠夫
熊坂敦子
剣持武彦
小玉晃一
山形和美
58 46 30 16 3

東西文学の発想

音の荒地とことばの祭典

——ストラヴィンスキーとエリオット——

アメリカ精神と日本文学

随筆の成立

——モンテ・ニユと兼好に見る——

西洋近代詩中の白楽天

——T・S・エリオットとウェーリーの交友にふれて——

東西の想像力の融合点

——泉鏡花における《かたり》の普遍性——

文学文化の交流

世紀末英文学と日本

文化交流の原理

——外国の日本文化研究を中心として——

鍵谷 幸信

135

佐渡谷 重信

158

ソレントン・
F・直子

171

平川 祐弘

183

由良 君美

197

佐藤 勝彦
武田 喬彦

217 231

サント・ヴィクトワール山のふもとで

——画家アンドレ・マッソンとの忘れがたき対話——

黎明期の佛蘭西學

——沖繩の史的役割——

詩心の触れ合い

——蕪村とラルボー——

執筆者紹介

あとがき

竹本忠雄

244

富田仁

257

芳賀徹

270

利沢行夫

287 281

近代日本文学と西洋

朔太郎の外国

久保 忠夫

一

「自分は倫敦といふ都会を知らない。」と、萩原朔太郎は「詩集十三月を評す——竹村俊郎君の近著——」（『作品』昭5・5）に書いている。朔太郎は外国へ行ったことがなかったから、「知らない」のはロンドンだけではない。パリも知らなければ、ベニスも知りはしなかった。しかし、上の文章につづけて「しかしこの詩を読むと、あの煤煙に雲つた空の下で無数の貧民窟が混み合つてゐる、薄暗い大都會が眼に浮んでくる。」と記している。文芸というものは、言語をもつてする芸術であるから、当然のことのように思われるであらう。けれども、本当にそうであらうか。谷崎潤一郎にこういうことばがある。

ラヂオと云ふものは、何しろ耳だけに訴へて来るものだから、どんなものでも何となく空々しい感じがして、いつそ、歌舞伎劇の放送のやうに、前に何度も舞台を見て知つて居り、その俳優の癖や仕種などにも馴染があるものと、多少は自分の頭の中で補ひがつくから、まだましたが、さうでないものは実

に空々しい感じがする。(谷崎潤一郎談「三十分放談」△創元」昭15・1)

別にラジオと文芸作品とをすりかえるつもりはないが、この問題に関する限り、両者は本質を同じくすると考える。谷崎が作家であるだけに、わたしはこのことばを重視する。

ここで思い出されるのが、夏目漱石の『三四郎』(『朝日新聞』明41・9・1(同12・29))における、三四郎と与次郎との会話である。「先生は東京が汚ないとか、日本人が醜いとか云ふが、洋行でもした事があるのか」と三四郎がいう。「なにするもんか。あゝ云ふ人なんだ。万事頭の方が事実より発達してゐるんだからあゝなるんだね。其代り西洋は写真で研究してゐる。巴理の凱旋門だの、倫敦の議事堂だの沢山持つてゐる。云々」と与次郎が答える。これは、上田敏の西洋留学送別会(明40・11 上野精養軒)における万歳三唱の前口上にある

別に西洋へ往つたからつて、倫敦塔が動き出す訳ではないから、西洋へ往くのは無駄なことだ。西洋の風俗が見たいのなら、写真や活動写真で沢山だ。云々(登張竹風「上田柳村、因に夏目漱石のこと」、『人間修業』昭9・7 中央公論社)

ということばにつらなるものであろうが、ここにあるように、「写真や活動写真」といったものが、少なくとも一たびは媒体とならなければ、活字をメディアとする詩をよんでも、ロンドンの情景は浮んで来ないであろう。情景という局面についていえば、朔太郎の外国は、絵葉書とかパノラマによる外国であつたといえよう。「ああ笛鳴る思ひいづるはパノラマの巴里^{パリ}の空の春の夜の月

『桐の花』大2・1 東雲堂書店）とうたったのは北原白秋であるが、朔太郎もまた、『西暦千八百十年頃の仏国巴里市を見せるパノラマ館』（『古風な博覧会』、『萩原朔太郎詩集』昭3・3 第一書房）とうたっているのである。そうして、そのいのちなきパノラマに生氣を与えるのが、大井町の風物であったり、故郷前橋の風景なのである。「煤煙に雲つた空の下で無数の貧民窟が混み合つてゐる、薄暗い大都会」ロンドンが「眼に浮んでくる」ためには「煙突と工場と、さうして労働者の群がつてゐる、あの賑やかでさびしい街」（『大井町』、『詩と隨筆集』昭3・5 文芸春秋社）大井町の体験がなければならなかつたろう。また、『氷島』（昭9・6 第一書房）が生きた具象となるためには、「春光」（『婦人公論』昭15・4）で、故郷上州の早春を叙して、「遠い越後境の山脈は、雲間をもる太陽の光線で、夢の中に見る氷山のやうに、白く悲しく漂渺と光つてゐる。それが人々の心に、言ひがたい郷愁の情をそそのものである。」としてゐるやうに、春なお白皚皚の雪におおわれて、上越国境によこたわる山脈が必要であらう（同じことは、『萩原朔太郎詩集』の「沿海地方」「荒寥地方」などにもいふ）。
 朔太郎における外国の視覚的体験はまずかういうものであったといえよう。そうして、それは世の多くの人々のそれと、大してちがわないものであったといえるかと思う。つぎに「自奏機」とマンドリンとに代表される外国の聴覚的体験がある。さらに、これらのやうに直接知覚にうったえるものを形而下の外国体験とするならば、「ニイチエとドストイェフスキイは、殆んど崇拜的に好きです、就中ドストイェフスキイの神秘思想は、私の思想生活に於ける最高の権威です。

……抒情詩人としてはヴェルレーヌの純樸な態度を、何よりも高貴な者だと思ひます。散文詩人としては、何といつてもボオが世界第一の偉人でせう。」（『最も好む人』、「文章俱樂部」大7・5）といった、あるいは、「寂しき人々」でも「人形の家」でも今度の「マグダ」でも結果はいつも旧思想の敗北、近代人の勝利に終つて居るけれ共それは西洋の事件であつて日本の話ではないのだ、」（明45・5・17、津久井幸子あて）といった形而上的外国体験がある。もちろん、形而下的外国体験と形而上的外国体験とは、互に補いあつて、一つの全体として、朔太郎の外国体験となつてゐるわけであるが。

二

上に引いた「最も好む人」というアンケートに、「ニイチエ」、「ドストイェフスキ」、「ヴェルレーヌ」、「ボオ」が出てくるが、朔太郎はこれらの人々の作品を原語で読んだのであろうか。ここに、朔太郎と外国語の問題が出てくる。朔太郎は中学で六年間、予備校で一年間、五高——第一部乙類（英文科）——で一年間、六高——第一部丙類（独法科）——で約二年間、英語を学んでゐるし、ドイツ語も六高では学んでいる（五高における第二外国語もドイツ語と推定される）。そして、明治四十一年九月に入学した六高での第一学期の成績は、英文七五、独語七五、独文法八九、独語（外人）八八となつていて、五高での復習のようなものだとしても、なかなかの成績である。しかし、朔太郎は、翻訳を通して外国の作品に接したのであり、英語ないしはド

イツ語の原書、あるいは、英訳ないしはドイツ語訳によって、ロシア文学なり、フランス文学なりに接したことはなかったと見られる。その中であって、例外的なものをひろえば、次のようになる。

中学の同級生で、五高、六高とも一緒だった洞健雄は「六高時代」(『上毛新聞』昭17・5・17)と題する回想に「それ(筆者注、六高時代)は端的に言へば、君の雌伏時代と云ふことができよう、恐らく君の同窓は将来中央詩壇の大家として活躍されようと想察するどころか隠された鋒鋩を見抜く者も居なかつた。たゞ一篇の訳詩を某教授に激賞された位のものであつた。」と記している。ここにある「訳詩」についても、「某教授」についても明らかでないが、「訳詩」は、あるいは、ゲーテの詩であつたかも知れない。それはつぎのこととかかわる。

朔太郎が詩壇に出たころの作品を整理した「習作集」(第八巻)と名づけたノートに、「稚子」と題して、また、「(ハイネの、こども、さらひより)」と附記して、次の詩が出ている。——大人の眼には見えがたき／子とろ子とろのわけものが／ものゝ影よりさしまねく／その怖ろしさ哀しさに／のどもさけよとおびへ啼く／逢魔が時のやるせなき／稚子のこゝろをたれか知る。——ハイネは思いちがいで、ゲーテの「魔王」(エルケーニツヒ)の訳(?)であることに間違ひはない。大正四年の交のものと考えられるが、朔太郎の主筆したマンドリン、ヴァイオリン研究・ゴンドラ洋楽会の演奏曲目解説に「若き日の夢」(小唄)があり、これに「プロシヤの民謡『生活を樂しめ』の原曲に本会に於て作歌したる邦語の歌詞を附したるもの」と説明したあと、その歌詞

を挙げてゐる。

▽あゝ秋の空、あゝ晴れわたたりて、青空をば、笛の音、思ひ焦れしひと、今はいづこにあらん、若き日の夢はた遠くすぎぬる

▽あゝ春の海、あゝ風ざわたりて、青海をば、梶の音思ひ焦れしひと、今はいづこにあらん、あこがれの夢はた遠くすぎぬる。

大正五年十、十一月ごろ、すなわち、『月に吠える』編集のころ、高橋元吉にあてて、

たしか兄はホイットマンの『リープス オヴ グラス』（詩集）をお持ちのやうでしたが、若し、御入用がなかつたら、失礼ですが小生にゆづつて戴（モト戴）くわけに行きませんか。拝借して汚すといけないから成るべくならゆづつて戴（同前）きたいのです。原価でゆづつていただければたいへん有りがたく存じます。

そして、つづく手紙に、

草の葉を頂戴（同前）したことを非常にうれしく存じます。それでは失礼ですが、頂戴（同前）いたします。いづれ何かのときに御礼をすることが出来ると思ひます。

と書いているので、希望のかなえられたことがわかる。もつとも、このホイットマンの詩集が翻訳か原書かはっきりしないとも、一応はいえようが、白鳥省吾訳の『ホイットマン詩集』が新

潮社から、富田碎花訳の『草の葉』（第一巻）が大鑑閣から、それぞれ出たのが大正八年五月であるから、原書にちがいない。『リープス オヴ グラス』であつて、『草の葉』でないことと思ひあわせれば、原書であることは動かかならう。ただし、果して読んだものかどうか、読んだとしてその反応は、といった疑問は残る。

朔太郎が、翻訳によつてしか外国の作品を読まなかったことを証する発言がある。

『虚妄の正義』（昭4・10 第一書房）の「詩人と外国語」は、

外国語を学ぶことの危険は、ニイチエによつて指摘された通りである。即ちそれは「母国語の精やかな言語感覚の根に置かれた斧」であり、「その感覚はそれによつて癒しがたく傷つけられ、打ち滅ぼされてしまふ。」それ故に「最も大なる文章家を生んだ二つの国民、即ち希臘人と仏蘭西人とは、何等の外国語を学ばなかった。」のである。

と、ニイチエの『人間的な、余りに人間的な』（新潮社版・生田長江訳ニイチエ全集（上）二二六七）をふまえて、こう書き出され、次のように主張されている。

西洋の詩壇を見ても、日本の現在する詩壇を見ても、概して多くの善き詩人は、外国語に対する素養を欠いてゐる。一般の場合を言へば、外国語に得意を感じてゐる詩人は、丁度それだけ、母国語に対し、感覚を欠き、言語の精やかな触手を持たない。（英語や、独逸語や、仏蘭西語やを得意とする詩人が、翻訳としてすら、いかに拙い日本語の詩を書いてるかを見よ！）より少く外国語を知つてゐる作家は、その逆比例に於て、丁度それだけ日本語の詩を巧みに作る。そして絶対に、全く外国語を知らない詩人

は、いつでも母国語の詩人として、天才的にすぐれた言語を所有してゐる。稀れなる例外を除いて言へば、西洋でも日本でも、この事實は常に同じである。

この文章については、どのようないきさつで書かれたかということを考えておく必要がある。それをよく語っているものに「愛誦詩篇に就て」(「詩歌」大4・4)がある。

(前略) なんかんづく川路柳虹と申すフランス派の大家の如きは『日本の詩壇は存在して居るのか、存在して居ないのか、心細き極みである』といふやうな頗る自暴自棄的の言葉を発せられ候こと気の毒の至りに候、川路氏は存在せずとも日本現今の詩壇は立派に成長致しあり候あひだ御安心下され度候(中略)彼の西洋まがひの翻案詩に就いては小生の関はりなきところ、かやうの者は外国語の造詣ふかき諸家に御まかせ致し、我々は一意専心我々自身の実感を我々自身のリズムに盛りあぐるために手を磨くものに御座候。日本人の詩は西洋人の詩に相似せるが故に光るに非ず、彼とは全々別種にして然も彼の持たざるものを我が所有する故に光るものに候。

このようにして、朔太郎は、みずからの外国語に対する才能のなさを自覚し——たしかに、酒に別腸あり、詩に別才あるように、外国語にも、別の才能がある——、そのすぐれていると認められる、彼のいわゆる「三木露風一派」とは、逆のコースを歩んだわけである。「我々自身の実感を我々自身のリズムに盛りあぐる」という道をえらんだのである。朔太郎の詩の成功の要因には、こうした外在的なものも挙げられる。そして、三木露風の一派を牆壁として、はやくも、